

2024年10月20日 主日礼拝(第二)

説教題「壊されなさい」エフェソの信徒への手紙2章14～22節

主任牧師 加藤 誠

「そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり…」「キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神のすまいとなるのです。」(エフェソの信徒への手紙2章20節、22節)

今月は「教会」について聖書から聴いています。「信じなさい」「建てられなさい(この岩の上に)」に続いて、今朝は「壊されなさい」です。

先週、主イエスが弟子のペトロの信仰告白を受けて、「この岩の上に、わたしの教会を建てる」と言われましたが、いつ「主イエスの教会」は建てられていったのでしょうか。実は弟子たちが主イエスと共に福音宣教をしている間は、彼らは「教会」として建てられていません。復活した主イエスによって呼び集められ、この世界に向けて派遣される中で、彼らは「教会」として建てられていきました。

地上の主イエスに従っていた時の弟子たちと、復活の主イエスによって建てられていった「教会」と。どちらも主イエスに呼び集められた群れでありながら、いったい何が違っていたのか。両者の決定的な違い。それは「十字架の経験」です。地上の主イエスに従っていた弟子たちはまだ十字架を知りません。「十字架なしの群れ」でした。彼らは自信と自負にあふれていました。実際、弟子たちはいろいろなものを後ろにし、犠牲にして主イエスに従ってきていました。多くの人が主イエスに熱狂して従い、多くの人が途中で脱落していましたが、それでも弟子たちは主イエスに最後まで従い続けました。「あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた」(ルカ 22:28)と主イエスが言われたように、弟子たちは幾多もの厳しい試練を主イエスと共に耐え忍んできたのです。

十字架に向かう前に、弟子のヨハネとヤコブが主イエスに願いました。「あなたが栄光をお受けになる時、一人を右に、一人を左においてください」と。それは弟子たちが心の中にずっと抱いてきた思いがついポロリと口から出てしまったのでしょうか。それは彼らの正直な思いでした。「イエスさま、あなたはご存知ですよ。僕らがあなたに従うために、その陰でどれだけ苦勞して、頑張ってきたか!!」。けっして出来の良い立派な弟子とは言えないにしても、それでもずっと主イエスに従ってきたことへの自負、自信が、彼らの心の支えになっていたのだらうと想像します。ペトロが「たとえ、みんながつまづいても、わたしはつまづきません。たとえご一緒に死ななければならなくなっても、あなたを知らないとは言いません」と主イエスの前で語った言葉に嘘はなかった。ペトロは本気で主イエスのことを愛していた。他の何にも代えて主イエスを第一に愛していたのです。そういう意味で、地上での主イエスに従う弟子たちは「恐れを知らぬ信仰の勇者、主イエスを本気で愛した者たち」でした。

しかしその彼らの主イエスへの信仰と愛、自負、すべてが粉々に打ち砕かれ、吹き飛ばされてしまったのが十字架の出来事です。自分たちの中から裏切者が出て、一番弟子のペトロも「イエスなど知らない」と三度も否定してしまいました。「恐れを知らず、主イエスを愛してやまない勇者たちの集団」は完全に崩れ去ってしまったのです。

復活の主によって呼び集められたのは、信仰と愛と自負を砕かれ失った者たちでした。自分の勇気と信仰と愛がどれほどちっぽけなもので、肝心な時に役に立たないものかを思い知らされた者たち。主イエスの祈りと励ましがなければ何もできない。立ち上がる力もない。ただ聖霊の助けと導きを祈り求める者とされていく（白旗を掲げていく）中に、主イエスの教会は建てられていきました。

「教会」はひとりでは建ちません。二人または三人が、主イエスの名で共に祈りたいと集められるところに建てられていきます。「共に」賛美し、「共に」祈り、「共に」神の働きを担い合う交わり。それが「教会」です。しかしながら、私たちはその「共にの交わり」を自分の力で造り出すことができない。それぞれいろいろな感性、考え方、個性をもった者たち。けして「肌が合う者同士」と言えないお互い。その私たちが同じ思いになって、一つの祈りを共有し、呼吸を合わせながら何かをやり遂げていくことはなんと難しいことでしょうか。私たち自身の信仰や愛では、その「共に」を造り出すことは不可能だ！…というのが、十字架が示している事実です。

では、いったいどこで、私たちの「共に」は可能になり、「主イエスの教会」が建てられていくのでしょうか。それは人間の罪を背負い、敵意を滅ぼし、隔ての壁を壊す「和解と平和の主」（エフェソ 2：14 以下）においてです。この方を「かなめ石」として、この方の祈りにつなげられるところで、個性豊かに、バラバラに、あっちこっちを向いている私たちが和解に導かれ、お互いに組み合わされて成長し（21 節）、「一人の新しい人」（同 15 節）に造り上げられていく。「和解」とは単に仲良しになることではない。「十字架の前に降参する。白旗を掲げること」です。

また「和解と平和の主」が形づくる「共に」は、外国人や寄留者（同 19 節）など、当時のユダヤ人から見たら「想定外」の人びとも交わりに招き入れていく「共に」です。キリストの教会づくりは「事件」と呼んでもよいほどに、わたしが揺さぶられ、わたしの「共に」が壊され、ひっくり返されながら、「かなめ石」である主イエスの導きにおいて「共にの交わり」が豊かに広げられていく出来事なのです。

そのように十字架の「和解と平和の主」によって「建てられる教会」は、わたしの信仰や愛が砕かれ、「共に」が壊されていく歩みであることを今朝、覚えたいのです。なぜなら教会は「主イエスの教会」であって「わたしの教会」ではないからです。わたしがイメージする「共に」は壊されなければならない。「十字架なしの教会」ではなく「十字架がある教会」として建てられていきたいのです。